

まるっこ Marukko

Free

17

2024. 冬号

Maruko Central Hospital Public Relations Magazine

feature articles
特集
活

【丸子中央病院の理念】 本院は、質の高い医療・介護の提供を通じて地域のしあわせ創りに貢献します。

丸子中央病院 広報・PR マネージャー

安藤 あすか

丸子中央病院で結婚式をあげてから10年が経ちました。私は、7年前に娘を出産し子育てをスタートさせました。彼女は今、自分という時間を一生懸命に生きています。経験をしていないことに真つ向からぶつかっていく姿に、邪魔はしないよう、出来ることをサポートしていつてあげたいと思っています。

今の子どもたちには「多様性」という言葉が良く使われるようになりました。私は、昭和のほとんど最後の生まれですが、子どもの頃には聞くことがなかった言葉です。学校へ行けばみんなと同じことをすることが正しいという感覚をいつの間にか身に着けてしまい、緊張感のある中過ごすことも多かったように感じます。しかし、時代は着実に進んでおり、誰でも自分の考えや価値を発信することが出来るようになりました。自分とは違う考え方や価値観にも簡単に触れることが出来るようになりました。そして知らない誰かの新しい考え方に触れ、まず受け止めることが当たり前の文化を持つ、というのが今の子ども達です。

これだけ「多様性」と言われるようになってくると、日本の教育や、社会にはいまだに「同調」することが正しい

と、語り掛ける文化も存在していることも事実です。「多様性」と「同調」が混在している、現在の生きづらいうちに大切なことはなんでしょう。私は、世代を超えて歩みよる力が問われていると感じます。若い世代の考え、技術や進歩を受け入れる優しさ、そして方で過去の経験や知恵を尊重することの優しさを子どもたちに見せていくことは、色んな選択肢があつていい、色んな考え方があつてもいいという大人が伝えられる「多様性」なのかもしれません。



イラスト/森田 宏子

Contents 特集活 空き家のこれからとともに

連載第7回
丸子電鉄から読み解くー丸子の歴史
丸子は「まりこ」だった!? その②

トピックス
Marukko TOPICS



空き家の これからとともに

石井工務店 宮嶋 絵美子さん

少子高齢化、ライフスタイルの変化などにより著しく増加しているといわれている空き家問題。確かな空家数の把握は困難ですが、「H30 住宅・土地統計調査」によれば、上田市の住宅戸数 76,280戸のうち、空き家総数は13,060戸で空家率は17.1%とかなりインパクトのある数字です。

今回ご登場いただく宮嶋絵美子様は石井工務店に勤務されています。空き家のリノベーションは工務店の仕事の1つですが、宮嶋様はそれ以上のことを考えていらっしゃいます。宮嶋さんが「上田」の地にこだわり、このまちをより良くしようとする思いについてお話を伺いました。

「地元」上田への愛着

私は上田で生まれ、中学から高校までは上田で過ごしましたが、転勤が多い家だったので上田にずっといたわけではありません。大学からは長野県を飛び出し京都へ、卒業後は名古屋や東京で過ごしました。東京では店舗設計施工の会社にデザイナーとして勤め、業務の量も多く大変忙しく充実し

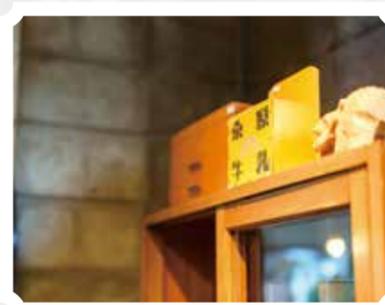
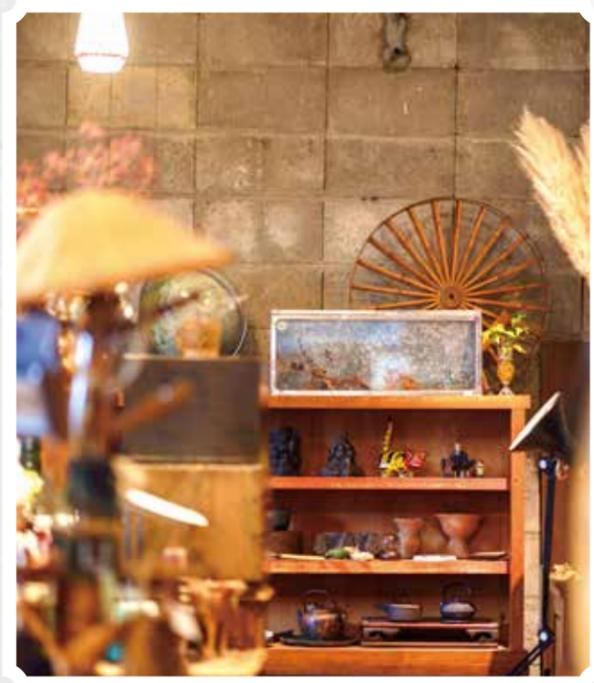


ていましたが、2011年の震災を機に自分の関わったお店が被災したことや、街が変わってしまう様子を目の当たりにし地元へのUターンを決意しました。東京にはたくさんの方がいます。ですので自分が関わらなくても街はどんどん作られていくと感じていたことや、大人になるつれ上田の街なかにシャッターがしまっている店が多くなり、地元のために自分ごととして働きたいという想いが強くなったのです。

ほかの地域にはない 上田の特長

上田の特徴は、まず何といっても「コンパクト」な街ということです。上田駅を降りると北には太郎山、南に千曲川と方向感覚がわかりやすい城下町で路地が楽しく、コンパクトに商店街や役場の建物が並びます。街の中心的存在の

上田城跡公園は昔、動物園があったりプールがあり、子どもの頃はよく遊びに行っていました。お城というよりは老若男女が憩う「公園」という認識が強かったです。街全体もレトロで、良い意味で開発されすぎていないのが心地良いです。大きすぎず、人が集まりやすい街の距離感と開拓されすぎない街の良さかなと思っ



誇りが持てるまちに

私はこれからも自分ごととして地元上田のまちづくりに関わりたいと思っています。そのため不動産の資格を取得、現在の会社で建築と不動産の視点でまちを見ています。26bldgを開き、まずは周辺の空き家の活用やエリアリノベーションに取り組み、試行錯誤しながらも進めていく中で、だんだんと周囲の賛同を得られるようになりまし
た。この地域の在り方を危惧



2023年12月の261。左:26bldg前、右:松乃湯の中の様子。

しながら、若い人たちもとても頑張っているまち、それが今の上田の印象です。

味のある建物や古い建物には物語があります。そこに新しいお店や住人が入ることでもまた新たな物語が生まれていく。そんな場面を見ることが今のやりがいです。現在は26bldg周辺にもお店が増えて人の流れが出来てきました。また、空き家の活用を進めていく中で古い道具や日用品にも出会います。それらも引き継いでいきたいと古道具屋もオープン。また、261（にーろく市）という古いモノや素敵なモノが集まる市場も定期的に開催しています。空き家やレトロな建物を使っ
たまち歩きも楽しめる蚤の市で、予想以上に人が集まるイベントとなり2023年12月には12回目を迎えます。



元銭湯(竹乃湯)の倉庫をリノベしたビル 26bldg。フロ(26)の語呂合わせからこの名称に。

拠点になった
お風呂屋さんの倉庫、
26bldg

名古屋・東京時代の経験を活かし上田のまちづくりに携わりたいと考えていました。レトロな街並みや味のある建物を衰退させず活かしていくことが目標でした。今の拠点になっている26bldg。(ニイロクビルディング)はまさに「良い味の建物」でした。この建物を見つけたのが2016年、そこから大家さんを探し、



レトロで味のある竹乃湯。現在は閉店しているが261では売店に変身する。

中の様子を見せてもらいました。予想以上にいい！もとは竹乃湯さんの倉庫だったので、薪のくずやケロリンの風呂桶などが雑多に積み重なっていましたが、ブロック造で大きすぎず、ツタに覆われている佇まいがとても気に入りました。ここを拠点にしたいと思いついて1年近くかけて2017年4月に大家さんと契約、イベントスペースなどを経て今の状態に落ち着きました。ここがスタートになって私のまちづくりの取り組みが始まりました。

準備や運営も大変ですが、人々が楽しそうにまち歩きしているのを見ると大変充実した気持ちになります。上田の人が自分達のまちに誇りを持っているような、そんな活動をしていきたいです。

宅地建物取士 二級建築士
石井工務店株式会社
26bldg

宮嶋 絵美子



丸子中央病院×上田女子短期大学×アリオ上田 上田地域の3か所で同じテーマのイルミネーションを点灯!

今年もイルミネーションの季節がやってきました。イルミネーションのテーマは、SDGs「海の豊かさを守ろう」～光のaquarium～です。昨年に引き続き上田女子短期大学の学生がテーマを企画しました。海の豊かさを守る大切さ、全ての人の健康への願いをこのイルミネーションに託しました。今回は、アリオ上田様も加わり、上田地域の3か所で光り輝く海の生き物たちを見ることができます。地域とのつながりがあったかい季節限定のイベントです。是非、足をお運びください。

丸子中央病院 イルミネーション概要
点灯期間：11月24日(金)～2月29日(木)
場 所：丸子中央病院 正面玄関エリア
点灯時間：17:00頃～21:00頃



エントランスホールに約6mの絵画を設置しました

エントランスホールに洋画家 中西繁さんの絵画「黄昏のカレル橋」(プラハ・チェコ)を設置しました。ブルタヴァ河・スメタナ記念館付近からの眺めだそうです。院内でヨーロッパの美しい風景を是非お楽しみください。

「病院に突如現れたビックサイズの絵画!」
黄昏のカレル橋設置作業風景 Youtube で配信中

視聴はこちらから▶



編集後記

2023年は地方にとって少子高齢化の影響による労働力不足が顕著になり始めた年となりました。しかし、民間の活力が上田を魅力的にしていることも、この広報誌の取材を通して知ることができます。宮嶋さんはじめ、今まで取材でお会いした皆様の取り組みは、「ピンチをチャンスに変える」取組だと痛感します。Marukkoはそういう皆様にフォーカスする広報誌であり続けたい、そのように感じる年の瀬です。
(2023年12月)



青空の中、261(にーろく市)という市場で人々が集まっている1コマ

- 発行
特定医療法人 丸山会 丸子中央病院
経営企画課 広報係 Marukko(まるっこ)制作委員会
〒386-0405 長野県上田市丸中丸子1771-1
- 編集・進行
北澤 淳一(丸子中央病院)
安藤 あすか(丸子中央病院)
春日 真翔(丸子中央病院)
- アートディレクター
五木田 忠之(MOKUBA.CO.,LTD.)
- デザイン
MOKUBA.CO.,LTD.
- お問い合わせは…
丸子中央病院 経営企画課 広報係
Marukko(まるっこ)制作委員会まで
TEL.0268-42-1111
月曜日から金曜日、10時～17時(祝日・休日・年末年始を除く)

上田丸子電鉄から読み解く—丸子の歴史

かつて丸子町(現・上田市)は製糸産業が盛んで、物流・旅客両面で人の動きの多いところでした。このため、長野県内でも早い時期に鉄道が敷設された場所です。丸子の鉄道の歴史を振り返ることで、丸子の歴史をさかのぼります。



看板には「KAMIMARIKO」(かみまりこ)との記載



駅名標には「かみまるこ」の文字後ろの建物は丸子映画劇場



Marukko VOL.09にて「丸子」を「まりこ」とも読(呼)んでいたが、それを「まるこ」という読み統一する動きが昭和36年にあったとの記事を掲載しました。その年は丸子町発足50年という記念の年でした。さらに10月には丸子実業(現・丸子修学館)高校が野球の北信越大会で優勝を果たしたことで翌年春の選抜出場が確定的となり呼称統一の動きが高まったのです。当時取材協力をいただいた酒井昭水様によると、「町議会の議決を

経て「まるこ」の読み統一した」とのことでした。記事執筆後、上田公文書館にて昭和36年～37年の丸子町議会議事録を閲覧することができました。しかし、呼称統一についての議題については一切記載がありませんでした。確かに、丸子電鉄の駅の写真を読み解いていくと、駅名標は改められ「まるこ」読み統一されたようです。一方、1967年(昭和42年)に撮影された写真の中には、「KAMIMARIKO」のロゴが残っている

看板もありました。呼称統一の動きから6年経っても修正されていないことから見ると、「まりこ」という読みにも一定の市民権があったのだと思われれます。ここからは想像です。おそらく何らかの形で丸子町議会や丸子町役場内では「まるこ」読みへの統一の話題が内々にはあったが、「まりこ」と読むべきと考える町民への配慮もあり、それを公にしなかったのではないのでしょうか。今日では、丸子(まりこ)ワイナリーが観光地となり多くの人が訪れており、「まりこ」という読み方もまた受け入れられ始めている状況は、感慨深いものがあります。

写真提供：奥村栄邦様 ※写真はすべて1997年昭和42年に撮影されたものです。